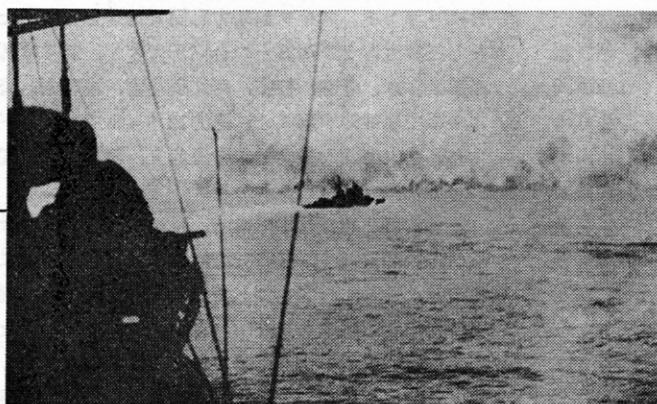


ア ツ ツ 島 沖 海 戦

Battle of the Komandorski Islands

by Takao Ishibashi



カットはアツツ島沖海戦における那智を、統航する摩耶より望んだ光景。水平線には米艦隊の展張した煙幕が見える。

石橋 孝夫

優勢な兵力と有利な対勢に恵まれながらなすことなく終わり日本海軍史上に汚点を残した海戦の実相

昭和18年（1943年）3月27日、アツツ島西方で重巡を基幹とする日米両艦隊が約3時間半にわたって砲火を交えた海戦を、日本側ではアツツ島沖海戦と呼称し、アメリカ側ではコマンドルスキー諸島海戦と呼称する。

海戦は日本がほぼ倍の兵力を有し、米艦隊を追撃する有利な態勢にありながら、長距離砲戦に終始し、決定的戦果をあげないまま物別れに終わった。日本側としては極めて不本意な拙戦として評価されている。あたかも戦場となった北方海域の陰鬱な雰囲気をもそのまま反映したような海戦であった。

1. 背景

太平洋戦争の開戦前、千島およびアリューシャン方面海域は日本の対米戦略上、それほど重視されたことはなく、主に防御上の見地より考慮された程度で、それも対ソ戦略の含みが強かった。したがって開戦直前この方面向けに編成された第5艦隊も、軽巡2隻、特設水上機母艦1隻、特設巡洋艦2隻という軽微な兵力しかなく、その任務も本土東方海域の哨戒、アリューシャン方面の警戒、小笠原方面の防備といった地味なもので、ほかに対ソ警戒も兼ねていた。

このように地味な北方海域が急にクローズアップされ

たのは、昭和17年（1942年）4月18日のドーリットルの日本本土空襲によってであった。この時第5艦隊麾下の特設哨戒艇群は、哨戒線上にあってよくその任を果たし、敵空母出現を報じたがその損害も小さくなかった。この本土空襲が、当時作戦準備が進行していたミッドウェー、アリューシャン作戦をより促進、実施させる結果となったことはよく知られているところである。同年6月のミッドウェー作戦は主力空母4隻を失って失敗したものの、アリューシャン作戦は当初の予定どおり順当に進行し、キスカ、アツツ両島の占領に成功した。

本来両島の占領は本土空襲を企図する米航空機の基地としての使用を封じ、米空母部隊の本土空襲を早期に発見する哨戒線を前進させ、また米ソの連絡を遮断することなどが主目的であり、冬季までの短期確保しか考慮されていなかった。

しかしその後、再度の占領は困難との判断から両島の長期確保が決定され、17年7月には陸上兵力のほかに水上戦闘機6機、甲標的6基などの基地防衛兵力が増派された。

これに対し、米軍も大型機による空襲、潜水艦戦の強化などで反撃を開始し、さらに8月に入るとガダルカナル島反攻と呼応するかのように、水上艦によるキスカ砲

撃まで行なわれるにいたった。このような思いがけない米軍の強力な反撃に対し、日本側はまず陸上兵力の増強を企てることになったが、わずかな水上戦闘機隊だけでは、制空権を米軍ににぎられて苦戦を強いられることになった。

10月に入ると進出していた水上艦艇部隊も撤退せざるをえず、輸送も高速の駆逐艦に頼るようになった。中央も当初は、ソロモン方面と同じ航空消耗戦となることを嫌って陸上機の進出に消極的であったが、同年末に陸上航空基地建設を決定するにいたった。

この間、補給輸送作戦は主に艦艇により実施されていたが、12月に水上戦闘機が進出したことにより、再び船団輸送が再開され、翌18年1月、2月にかけてほぼ順調に実施されて、目的を達するかに見えた。しかし2月に入るとキスカ、アッツ両島周辺に米艦隊がしばしば出現するにいたり、ついに2月20日、第16船団のあかがね丸(3,121総トン)が護衛の海防艦八丈と別れてアッツ島に向かう途中、重巡インディアナポリス Indianapolis などの米艦隊に捕捉、撃沈される事態を生じた。したがって以後の輸送は航空機だけではなく米水上艦艇にも対処せざるをえなくなり、北方部隊の水上艦艇の全力をもって輸送作戦の護衛を行なうことになった。

2. 発 端

昭和18年3月10日、アッツ島に対する第1次の集団輸送が成功したのに引き続き、同月20日、第2次集団輸送作戦が発令された。この作戦には、当時の北方部隊の主力が作戦全般の支援と敵艦隊の撃滅を任務として加わっていた。

主隊は第5艦隊司令長官細萱戊子郎中将の座乗する重巡那智を旗艦として、重巡摩耶、軽巡多摩の3艦で第21戦隊を編成し、さらにこれに第21駆逐隊の若葉、初霜が加わっていた。このうち摩耶は2月に第4艦隊より増派されたもので、従来第21戦隊にあった軽巡木曾は、第1次輸送作戦後、修理のため舞鶴に帰されていた。輸送船は浅香丸(9,445重量トン)、崎戸丸(9,883重量トン)

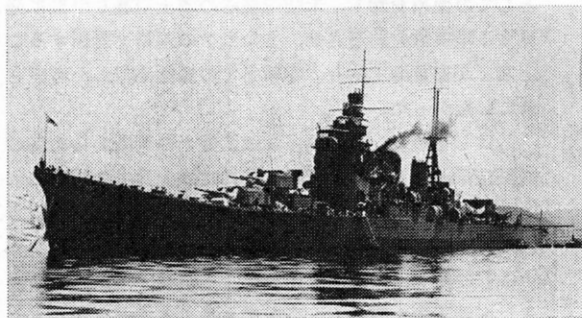
の2隻でロ船団を編成し、ほかに単独船として三興丸(6,946重量トン)があった。前者を第1水雷戦隊司令官森友一少将が軽巡阿武隈、第6駆逐隊(雷、電)で直接護衛し、かつ三興丸をも間接的に護衛、同船の直接護衛としては駆逐艦薄雲が当たることになっていた。

かくして第2次輸送部隊は3月22～23日に三興丸および薄雲、ロ船団および護衛部隊、さらに主隊の順で幌筈海峡を出撃した。

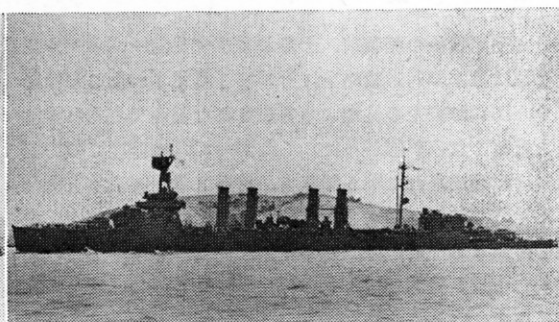
アッツ島突入は当初3月25日を予定していたが天候悪化のため延期され、待期中のロ船団および護衛部隊は26日にコマンドルスキー島南方海面で主隊と合同した。しかし三興丸および薄雲との合同ができず、部隊は那智、摩耶、多摩、若葉、初霜、阿武隈、雷、浅香丸、崎戸丸、電の順で単縦陣を形成し、速力12ノットでコマンドルスキー島南東海面を遊弋しつつ三興丸、薄雲との合同を期していた。

3月27日2時(日本標準時、現地時間7時)部隊が反転北上後間もなく、2時37分阿武隈は200度方向に船影を発見、これを合同を期していた薄雲、三興丸と判断して特に警戒処置をとらなかった。当時海上は平穏ながら、天候は曇り、日出前のため視界はあまり良好でなく、一時先の船影を見失ってしまった。当日の日出は3時20分であったが、これより前3時10分に浅香丸は165度方向に艦を発見、3時13分阿武隈はこれをオマハ Omaha 型軽巡1隻および駆逐艦2隻と確認して各艦に通報、3時26分その後方にさらにペンサコラ Pensacola 型重巡1隻および駆逐艦2隻を発見した。

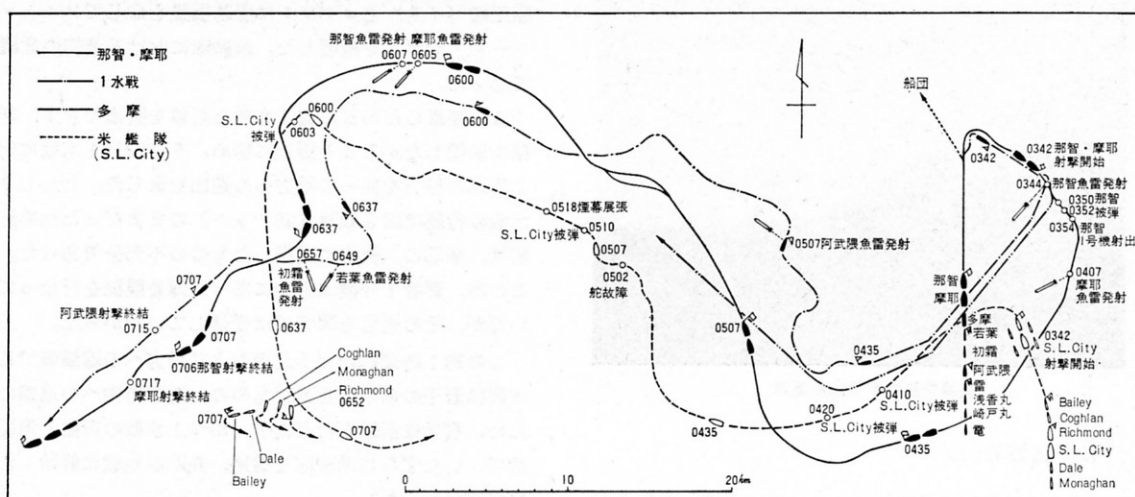
一方、3月27日の日出1時間前、C. H. マックモリス C. H. McMorris 少将の指揮する第16.6任務部隊はコマンドルスキー島南方100哩を駆逐艦ベイリー Bailey、同コグラン Coghlan、軽巡リッチモンド Richmond (旗艦)、重巡ソルト・レーク・シティ Salt Lake City、駆逐艦デイル Dale、同モナガン Monaghan の順で搜索隊形をつくり北北東に向かっていった。部隊は数日来アッツ島に対する日本の補給部隊を捕捉するため、アッツ島西方海面を遊弋していたものであった。



日本艦隊の旗艦那智。写真は昭和5年頃の艦影。



アメリカ艦隊の旗艦リッチモンド Richmond。



戦間経過要領図

2時30分、乗員が朝食を終えて戦闘配置につこうとした時に、先頭のコグランは北方7哩にレーダーのコンタクトを得た。ほぼ同時に旗艦リッチモンドのレーダーも5隻の艦影を探知、軽巡もしくは駆逐艦に護衛された輸送船と判断し、部隊は25ノットに増速して目標に向かった。

3時20分にいたりリッチモンドの艦橋より10隻の艦影が視認され、艦型ははっきりしないものの、数分後に艦列に2隻の重巡と2隻の軽巡の姿を認めることができた。日出とともに視界は広がり、約35,000メートルに達していた。

3. 会敵と緒戦

日本側の戦闘準備ははかばかしくなかった。まず最初の敵発見を三興丸、薄雲と誤認して通報を怠り、3時13分の敵発見まで戦闘準備はまったくなされず、増速と砲戦準備に手間どった。

しかし敵兵力が重巡1隻、軽巡1隻、駆逐艦4隻と、自隊に較べて劣勢であることを見て、船団を北東に退避させるとともに、主隊、第1水雷戦隊の単縦陣のまま南東に変針し、米艦隊の退路を断つように第5戦速(32～33ノット)で反抗対勢となった。

3時42分距離約20,000メートルで那智が初弾を発砲、摩耶がこれに続き、ほぼ同時にソルト・レーク・シティも発砲応戦して戦闘は開始された。

この時米艦隊は輸送船の攻撃を企図して日本艦隊への接近に努め、ソルト・レーク・シティは旗艦に続航しつつ緊密な戦闘対勢をとろうとしていた。しかし距離はかなり開いており、駆逐艦ベイリーとコグランがこの巡洋艦2隻の左舷前方、同デイル、モナガンが右舷側に位置していた。

3時44分～46分那智は右舷の発射管より魚雷8本を発射、摩耶は時期を逸し若干遅れて4本を発射した。しかし、おりから米艦隊が日本艦隊の接近に応じかねて南西に変針したため効果はなかった。

3時50分那智は艦橋右舷後部に被弾し、戦死11名、負傷21名を生じ、通信電路を損傷した。3時52分さらに1弾が発射管室に命中、戦死2名、負傷5名を出した。

これらは米駆逐艦の砲撃によるとの観測もあったが、距離の点からも駆逐艦の12.7センチ砲とは考えられない。米戦史も認めているように、ソルト・レーク・シティの第3、4斉射によるものと思われ、全般に緒戦の同艦の射撃の見事さは日本側においても認めるところであった。

那智では、先の被弾と前後して機関科の発電機操作のミスによって砲塔動力が停止し、方位盤電路を遮断するという事故が発生した。これを通信系の乱れから被弾のためと誤解して、砲塔動力の回復後も砲側照準のまま射撃を再開し、約30分間そのまま砲撃を続けたため、命中弾はまったく得られなかった。なお被弾後の砲撃中断時に、那智は搭載機のうち1号機を射出したが、2、3号機は主砲発射の際の爆風で一部破損し、火災の恐れがあったため海中に投棄された。

この間、摩耶は敵の目標になることなく砲撃を実施していたが、測距目標と射撃目標を取り違えるミスをおかして、これまた有効な射撃をできなかった。なお摩耶の搭載機については、射出の報告はなく、多摩、阿武隈についても同様で、結局海戦中上空にあったのは那智1号機のみであった。

かくして緒戦における日本側の戦闘は極めて幼稚なミスを重ねて、その圧倒的な砲力を生かすことなく逆に損傷を受けてしまった。



煙幕を展開する米駆逐隊。

4. 追撃戦(1)

米艦隊の南西への変針により、3時55分頃、主隊も南西に変針し、米艦隊の左後方より追尾する対勢となったが、大きく迂回したため距離は20,000メートル以上に開いた。この時多摩は単艦で米艦隊の右後方に進出、1水戦は遅れてその北方にあった。4時10分および4時20分頃、摩耶は初めてソルト・レーク・シティに命中弾を与えた。最初の命中弾は右舷搭載機に命中、火災を生じたため同機は海中に投棄され、第2弾も特に戦闘に支障はなかった。当時米艦隊の搭載機は旗艦リッチモンドとソルト・レーク・シティにあったが、旗艦の分はより決定的時期のため射出がひかえられていた。またソルト・レーク・シティの可動機は1機のみで、それも燃料を抜いてあったため射出できる状態になく、この被弾で多分可動機はなくなったものと思われる。

米艦隊が漸時西方に変針したため距離が開き、射界が艦首方向にせばまったため、摩耶は4時30分、那智も4時43分いずれも射撃を中断した。この時米艦隊の右後方に進出していた1水戦は米艦隊の砲撃を集中され、阿武隈は速力を28ノットに落として外方に退避し、距離を開くところとなった。しかし多摩は単艦よく追尾し、ソルト・レーク・シティはこれを那智、摩耶のための弾着観測の好位置と見て、砲火を集中し追い払おうとした。

4時45分頃、米艦隊は北方に変針した。これは再度日本側の輸送船を捕捉せんと企図したものであったが、日本側もこれを認めて変針、主隊が射撃を再開するとともに、5時2分全軍突撃を下令した。しかし集中砲火を浴びて距離の開いていた1水戦はこれに呼応できず、5時7分阿武隈が申し訳程度に魚雷4本を発射したものの効果はなかった。ただしこの攻撃で米艦隊は西方に針路を変え、5時2分、ソルト・レーク・シティは那智、摩耶の至近弾によって舵機が故障し、操舵角度を制限された。さらに5時10分、大角度の一弾が中甲板に命中し、左舷水線下外板を貫通して浸水を生じた。このため司令官は

駆逐艦ベイリーとコグランに煙幕展開を命じてソルト・レーク・シティを掩護した。米艦隊における最初の危機であった。

この煙幕のため日本側は有効な射撃を実施できず、射撃を断続しながらより接近に努め、5時33分1水戦に対し摩耶の後方を回って敵方への進出を命じた。しかし1水戦の行動は第3戦速(28ノット)のままだったため鈍重で、摩耶の左後方に進出したものの不十分であった。この時、那智1号機は上空にあって弾着観測を行っていたが、その通信を那智では受信していなかった。

この約1時間にわたる北西および西方への追撃戦で日本側は若干の命中弾を得たものの、艦首方向への追撃のため、有効な射撃を行なえず、かつ1水戦の行動も消極的で、いたずらに米艦隊を追尾、長距離砲戦に終始したにすぎなかった。

5. 追撃戦(2)

6時、マックモリスはこのまま西方へ退避することに危惧を感じ、南方に変針して、機を見て東方(基地)への離脱を企図した。日本側もただちにこれを認めて全軍突撃を下令した。しかし実際の行動は、その位置で南方へ変針して距離を一挙につめるのではなく、米艦隊の航跡を追う形で大きく迂回したため、後方からの追撃戦の形は変わらなかった。この間、6時5分~15分にかけて摩耶(4本)、那智(8本)、阿武隈(4本)の順でそれぞれ魚雷を発射したが、効果はゼロであった。

米艦隊では南方に変針後間もなく、6時3分ソルト・レーク・シティに4発目の命中弾があり、後部ジャイロ室と機械室に浸水、左舷に5度の傾斜をきたしたが、戦闘に支障はなかった。しかし6時25分になって燃料管の破損から後部缶室が停止し、速力は20ノットまで低下するにいたった。第2の危機が訪れたかに見えたが、同艦は間もなく速力が回復し、マックモリスは一旦命じた駆逐艦への魚雷攻撃を取り消し、南下を続けた。この間、日本側の主隊はソルト・レーク・シティの速力低下のため距離を13,000メートル前後につめ、決定打を与える好機に達していた。

6時40分頃にいたり主隊は南西に変針し、追撃を断念する形となった。主隊の右方にあった1水戦も間もなく主隊にならって変針し、6時49分~57分に若葉(6本)、初霜(5本)が魚雷発射を実施し、そのまま主隊の後方を回って、非戦側に位置する形となった。この好機に、わざわざ米艦隊にお逃げなさいと道をあけたような状態となったことについて、すなわち追撃を断念した原因については明確でない。ただ徹甲弾を打ち尽くしたことを残弾なしと司令部が誤判断したこと、米艦隊の行動が煙幕展開のため確認できなかったことなどによるものとさ

れている。

しかし、米艦隊の危機は去ったわけではなかった。6時50分頃よりソルト・レーク・シティでは海水が燃料に混入して缶が消え、主機械が停止し、電力も失われて6時54分には完全に漂流する最悪の事態を迎えた。同艦では弾丸の85パーセントを消耗していた。

司令官は万に備えて旗艦を同艦に接近させて乗員の移乗に備えるとともに、駆逐艦に対し魚雷攻撃の実施を命令した。ソルト・レーク・シティ救援に向かったデイルを除く3艦は、7時少し前より日本艦隊主隊に対して突撃を開始、距離10,000メートル前後で先頭のベイリーが魚雷5本を発射した。那智、摩耶はこれに対して砲火を集中、ベイリーは20センチ砲弾2発を受け、全電源を破壊、遮断され、反転して退避し、後続の各艦は魚雷発射を行なうことなく反転、続航して去った。主隊各艦はこの魚雷を避けるため西方に変針して、敵との距離はさらに大きく開いた。

6. 戦闘の終末

6時58分にソルト・レーク・シティでは前部機械が回復し、7時には速力15ノットで航行可能となった。すなわち機械停止は4分間だけであった。同艦の停止は上空の那智1号機により観測報告されていたが、那智にはとどいていなかった。

東方に変針した米艦隊は7時12分頃まで射撃を続けていたが、距離が大きく開き、7時25分には日本艦隊は視界より去った。

日本側は米駆逐艦に対する避雷運動後、針路を南西にもどしたが、すでに司令部では追撃の意志はなかった。米爆撃機が6時40分アムチカを出撃したとの情報を得たこともあって、7時17分に射撃を中止、7時30分には敵艦隊を見失った。以後船団を収容して作戦を中止し、幌筥に引き返して再挙を企てることとなった。

かくして約3時間半に及んだ戦闘は、双方ともに決定的打撃を与えることなく、不自然な結末の内に終了したのである。

日本側の被害是那智のみで、被弾7カ所、戦死14名、負傷21名、損傷は軽微で戦闘に支障はなかった。米側ではソルト・レーク・シティ被弾4、ベイリー被弾2、戦死7名、負傷20名であった。

7. 戦訓と評価

まず戦闘に参加した両軍の兵力についてみると、日本側が主力たる重巡、軽巡において米側の2倍を擁し、駆逐艦においては同数という優勢なもので、米側がこれを承知で戦闘を挑んできたことに注目する必要がある。

次に各艦について見れば(次1表参照)、日本側の那智、摩耶はそれぞれ条約型巡洋艦の第1、2陣として建造された妙高型、愛宕型の一艦で、兵装的に見れば列強の条約型巡洋艦中最も強力な艦と称してよかった。特に那智は戦前の改装により雷装および航空兵装も大幅に強化され、九一式徹甲弾、九三式魚雷を装備して、水上砲雷戦能力においては他にひけをとるものではなかった。

多摩、阿武隈はともに5,500トン型軽巡で、当時かなり旧式化していたが、代替艦の建造が遅れたこともあって、開戦時各艦隊で第一線にとどまっていた。特に阿武隈は第1水雷戦隊の旗艦であった関係で、戦前に雷装を強化された結果、従来の53センチ連装発射管4基を撤去して、後部兩舷に各1基ずつの61センチ4連装発射管を装備し、魚雷も九三式魚雷を搭載していた。

駆逐艦は初春型2隻、特型(Ⅲ型)2隻で、当時あっては若干旧式になってはいたが、まだ第一線用として充分なもので、兵装的には米駆逐艦より優れていた。初春型では九三式魚雷を搭載していたものと思われる。

これに対し米側の主力ソルト・レーク・シティは、同型のペンサコラとともに米条約型巡洋艦の第1陣で、兵

第1表 アッツ島沖海戦日米参加艦艇性能一覧

艦種・艦名	排水量(t)	速力(kt)	砲装(cm)	雷装(cm)	搭載機	艦型
重巡 { 那智	13,000	33.5	20.3Ⅱ×5, 12.7AAⅡ×4	61Ⅳ×4	3	妙高型
摩耶	11,350	35.5	20.3Ⅱ×5, 12AAⅠ×4	61Ⅱ×4	3	愛宕型
軽巡 { 多摩	5,100	36.0	14.0Ⅰ×7	53.3Ⅱ×4	1	球磨型
阿武隈	5,170	36.0	14.0Ⅰ×7	61Ⅳ×2	1	長良型
駆逐艦 { 若葉	1,700	33.3	12.7Ⅱ×2, 12.7Ⅰ×1	61Ⅲ×2		初春型
初霜	1,700	33.3	12.7Ⅱ×2, 12.7Ⅰ×1	61Ⅲ×2		"
雷電	2,000	34.5	12.7Ⅱ×3	61Ⅲ×3		特型
	2,000	34.5	12.7Ⅱ×3	61Ⅲ×3		"
重巡 Salt Lake City	9,100	32.5	20.3Ⅲ×2, 20.3Ⅱ×2, 12.7AAⅠ×8		4	Pensacola型
軽巡 Richmond	7,050	33.6	15.2Ⅱ×2, 15.2Ⅰ×6, 7.6AAⅠ×8	53.3Ⅲ×2	2	Omaha型
駆逐艦 { Dale	1,395	36.5	12.7Ⅰ×4	53.3Ⅳ×2		Farragut型
Monaghan	1,395	36.5	12.7Ⅰ×4	53.3Ⅳ×2		"
Bailey	1,620	37.5	12.7Ⅰ×4	53.3Ⅴ×1		Bristol型
Coghlan	1,620	37.5	12.7Ⅰ×4	53.3Ⅴ×1		"

第2表 日米両艦艇砲雷装力比較

	20.3cm砲	15.2cm砲	14cm砲	12.7cm砲	12cm砲	7.6cm砲	発射管
日 本	20/20		14/12	30/26	4/2		70/50
アメリカ	10/10	10/7		24/20		8/4	32/29

注) 合計/片舷を示す。北東方面海軍作戦(戦史叢書第29巻)による。

装的には主砲10門を搭載して那智などと同等であるが、防御的には貧弱であった。新造完成時には性能的にも若干問題を生じた艦で、速力も日本側に比べて1~2ノット劣っていた。

また軽巡リッチモンドは、日本の5,500トン型とほぼ同時期に建造されたオマハ型偵察巡洋艦の一隻で、5,500トン型より若干大型で兵装も強いが、いずれにしろかなり旧式化しており、第一線での使用は北方海域などの局地的なものに限られていた。なお主砲のうち、後部の2門は開戦前に撤去されていた。

駆逐艦のうち、デイル(DD353)とモナガン(DD354)はともに第1次大戦後に最初に計画されたファラガット Farragut 型に属する艦で、若干の近代化改装を実施し、射撃装置などを換装、備砲を1門減じていた。ベイリー(DD492)とコグラン(DD606)の2隻は開戦後に就役したブリストル Bristol(後期)型の新鋭艦で、兵装的にはあまり見るべきものはなかったが、速力はかなり優速であった。

米艦艇の装備で注意しなければならないのは、この時期に捜索用レーダーとともに、各艦が射撃用レーダーを装備していたと思われる点である。もちろん日本側では、初期の対空用の21号電探さえ備えていた艦はなかった。

全般の砲雷装数を比較しても、第2表に示すように日本側の数的な優勢は明らかで、特に雷装については日本艦艇は大半が次発装填装置を有していたので、実質的には米側の3倍近い優位にあったと見るべきであろう。

それでは日本側がその優勢な兵力を有しながら、なぜ長蛇を逸したのであるのか。

まず主観的考察を別にして、客観的な原因を上げてみれば次のようになる。

①敵発見の遅れ

②初期の反航戦における射撃指揮ミス

③追撃戦における主隊の射距離短縮の不足

④同戦における1水戦の敵方進出の不足

⑤南下戦における運動の誤り

⑥追撃切り時期の誤判断

⑦搭載機との通信不通

以上の要因は単に戦闘の経過にしたがって日本側の犯したミスを並べたもので、一つ一つが特に重大な意味を持つわけではない。たとえば①~⑤のミスを犯したとしても、まだ日本側が敵を撃滅できるチャンスは充分にあったのである。

ここに、このアッツ島沖海戦で示された日本側の拙戦の最大原因が、目に見えない要因として隠されているといえよう。すなわちこれは、単に戦術的ミスを連続したことで米艦隊をとり逃がしたということではなく、端的に言えば司令部以下の戦意不足、訓練不足の二つに尽きるのである。

これは先の各要因のすべてにつながるものである。

一旦敵を発見しながら味方と思いすごし、かつ報告を怠った単純なミスに始まり、敵発見時に那智では搭載機が荒天固縛のままで4番砲塔の旋回に支障をきたした怠慢、緒戦における那智の砲側照準、摩耶の測距目標と射撃目標の取違いミス、追撃戦において敵に接近肉迫する意欲の欠除、敵の避弾運動および煙幕に翻弄され命中率ゼロに等しい射撃力、自信のないまま申し訳で発射したような魚雷発射、敵方への進出をしるる1水戦の消極的態度、敵の南方変針に際しての故意とも思える接近運動意欲の欠除、さらには敵の航跡を乗り切って敵が重油を曳きながら逃走していることを知りながら、早く戦闘を打ち切りたいとする司令部の雰囲気、那智搭載機との通信不能に際して2番艦に受信させるなど、何らの解決策も講じなかった無策ぶりにありありと示されているといえよう。

もちろん、これらの背景としてはガ島戦以来の米艦の電探射撃に対する恐れ、緒戦の被弾による心理的圧迫、北方海域特有の雰囲気に影響された士気の低下、荒天の

第3表 日米両艦艇消耗弾数および魚雷数

	日 本							ア メ リ カ					
	那智	摩耶	多摩	阿武隈	初霜	若葉	雷	Salt Lake City	Richmond	Bailey	Coghlan	Monaghan	Dale
20.3cm砲	707	904						832					
15.2cm砲									271				
14cm砲			135	96									
12.7cm砲					6		13			482	750	235	728
高角砲	276	9						95	24				
40mm機銃												48	
魚 雷	16	8		8	5	6				5			

注) 北東方面海軍作戦(戦史叢書第29巻)による。

連続による警戒心のゆるみなども考慮する必要があるだろう。

しかし地域的な点は米側にも共通する問題である。ある意味ではこのような態勢で、夜間に米艦隊と会敵しなかったのを幸運というべきであろう。おそらく夜間の戦闘となった場合、レーダーのない日本側が大敗を喫したであろうことは容易に想像しうるところである。

もっと根本的なことは、戦後今日まで一般的に高く評価すべきとされている日本海軍の砲術能力が、はたして本物であったかという疑念である。重巡は戦艦に次ぐ砲力を備えた主要艦として、日米の艦隊決戦に際し、重要な役割を果たすべく猛訓練を課され、その射撃力について十分な自信を得ていたはずであった。しかし開戦直後のスラバヤ沖海戦で、まずその期待に反した結果を生じ、昭和18年末期以後、日米の重巡を含む水上艦艇同士が航空機の介在なしに交戦する機会は無くなったものの、この間夜間の奇襲的作戦を除いては、日本重巡がその砲力を評価どおり発揮した例は本海戦を含めてまったく見られなかった。もちろんその機会の少なかったことも原因しているものの、多分に疑念を感じざるをえないものがある。

最後に問われるのは指揮官の能力の問題であろう。これは、上は艦隊司令官から隷下の戦隊司令官、各参謀、さらには各艦長にまで及ぶ問題であるにしても、最終的

には最上級指揮官の手腕にかかることである。ただし本海戦で特に注目しなければならないのは、1水戦の全般的な戦意のなさであろう。これは先の各艦の消耗弾数および魚雷数が如実に物語っている(第3表参照)。米駆逐艦がいずれも多数の射撃を実施しているのに、射程に大差のない日本の駆逐艦が、非常にわずかの射撃しか実施していない。これは、射程距離まで進出していなかったと見るべき証拠の一つであろう。

いずれにしても本海戦における第5艦隊司令部および1水戦の戦意のなさは海戦後の研究会でも大部問題とされ、戦後の関係者の回想でもかなり明確に語られている。

戦場での信賞必罰の念に乏しい日本海軍当局もさすがに見かねたのか、海戦後第5艦隊司令官細萱中将の職を免じて予備役に編入、参謀長一宮大佐を更迭、さらに第1水雷戦隊司令部でも通信参謀(大尉)が更迭されている。

一方米側においては、戦術的に特に見るべき点があったわけではなかったが、戦意の点では特に問題とすべきことはない。逆に慎重さに若干欠けていたこと、すなわち兵力的に倍する敵艦隊に、作戦上の特別な考慮なしに挑戦して味方艦隊を危険にさらした責任は、結果的に敵の拙戦により救われたものの当然問われるべきものであらう。

航空情報



航空情報 臨時増刊

世界航空機年鑑1979

■あらたに航空機搭載ミサイル、グライダーを掲載

■世界航空機年鑑は、今年で25年目をむかえた日本で唯一の総合航空機年鑑です。現用中の機体はもちろん、新型機、計画機を全て収録し、写真、図面を大幅に改め、解説には最新のニュースやデータをもり込んで、更に内容を充実させております。巻末にはエンジン一覧、1977年11月～1978年10月迄の航空年表のほか、あらたに軍用機の搭載ミサイルおよびグライダーの解説を掲載するなど、特色をもたせました。

B 5判 386頁アート紙 定価3,000円 送料100円

あなたもできる ヒコ-キの操縦

If he can fly you can fly

航空情報別冊



航空情報 別冊

あなたもできるヒコ-キの操縦

■果しなく広がる大空に、鳥のように自由に飛んでみたいという憧れは誰もが持っている。しかし空を飛ぶ真のよろこびは、実際に操縦桿を握って空を飛んでみなければわからない。本書は飛行機の操縦を志す人や興味を持つ人たちのために、飛行機はどのように操縦したらよいのか、操縦桿を握って空を飛ぶ様子を、実際に即して詳しく分かりやすく解説したものである。

■カラー●軽飛行機の空撮●飛行機から見た風景、雲の写真集●アクロの世界■グラビア●日本で飛んでいる小型機とコックピット■本文●飛行機操縦の基礎●航空工学、法規、生理学、気象、管制と交話●飛行機操縦の応用●パイロットになるには。

B 5判 232頁 定価1,700円 送料160円

かんどうしゃ
(株) 酣燈社

〒104 東京都中央区銀座6-8-7 交詢ビル601号 ☎03-572-3421